



命の大切さと感謝の心

校長 五十嵐 俊子

まもなく1学期が終了します。私自身の経験をもとに、夏休みを前に子供たちに伝えたいことがあります。とてもありきたりで忘れがちですが、非常に大切なことです。それは、「毎日会ったり、話したりしている身近な人に感謝する気持ちをもつこと」です。私たちはみんな永遠に生き続けるわけではないのです。いなくなってからでは遅いのです。いつも自分の周りいる大切な人に感謝する気持ちを忘れないように、そしてその気持ちをしっかりと伝えることが大切だということを伝えたいと思います。

私事ですが、先月に父が86歳で亡くなりました。最後は入院したままで、絶飲食の数か月間でした。入院のきっかけとなった誤嚥性肺炎がなかなか完治せず、ここ数週間は、呼吸も苦しそうで、いつ急変してもおかしくないと言われました。何度か深夜に危ないという連絡を受けて駆けつけましたが、臨終のときは間に合いませんでした。

父は非常に厳格で気丈な人でした。自分に厳しく、仕事に厳しく、しつけにも厳しい人でした。その父が数年前に認知症を患った頃、「さっぱりわからん。」と、口癖のようにつぶやいていたことを覚えています。おそらく本人が一番辛かったのだと思います。その後、認知症は日々ゆるやかに進行し、父はどんどんと幼子のようになっていました。いろいろなことが理解できず、自分のこともできなくなってしまい、母を困らせることも増えてきました。老々介護の現実にも悩みながらも、私は、週末等に顔を見せることしかできませんでした。本当に感心したのは母の姿です。父に対して、いつも子供を見守るように笑顔で穏やかに接していました。異常な行動にも、それなりの理由があるのよと明るく笑っていました。

父は、病院での最後の一週間、やせて体も弱まり、意思の疎通もままならない中で、目の前で話しかけると何か答えようと口を動かしたり、手を握ると信じられない強さで握り返したりしてくれました。母に伝えようとしていた言葉は何だったのでしょうか。私自身は、ああ、今日も父は無事でよかったと安堵の気持ちで日々を送っていたのですが、母の感じ方は少し違っていたようです。父の苦しみを一緒に感じていたようです。亡くなった父に、長い間本当にお疲れ様、がんばったね、と優しく話しかけていました。

父の闘病を通してたくさんのことを学びました。人が老いる中で学ぶこと。それは、ひとつひとつできなくなっていくことへの諦めと受け入れ。たとえ若い時は活躍していても、老いたら誰かの世話になることの受け入れ。お世話をしてくれる人への感謝の念。それらをサポートしてあげることの大切さを実感しました。誰でも通る道。老いこそ明日の我が身です。若いうちは気付かなかったことも、その年齢に達してはじめて気が付き、わかることも多いのだと思います。

本校では、非常時訓練を通して、地震等の自然災害が起こった時や不審者が入ってきた時などの命の守り方、かけがえのない命の大切さを学習する機会を取り入れていますが、合わせて死生観をも育てる必要性を感じています。これからは超高齢社会です。人は、いつかは老い、いつか必ず死を迎えます。突然、自分の人生から去っていく人もいるでしょう。人生で出会った人々は、必ず何かしらの意味をもってそこに存在していたことを理解し、だからこそ、命のあることはあたりまえのことではないこと、すべてに感謝する心をもつことが必要です。

3世代で暮らす家庭が少なくなっています。夏休みに帰郷して、おじいさんやおばあさんと接する時間は貴重です。高齢者の方と接することを通して、子供たちなりに感じる人が多いと思います。自分たちが毎日当たり前のように生きていけることへの幸せも感じて欲しいと思っています。